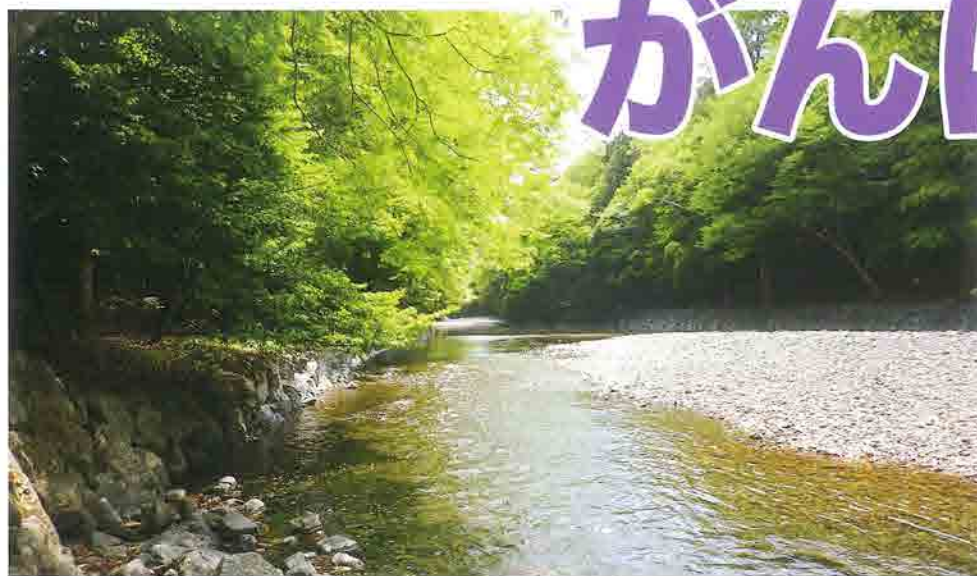


統合医療で がんに克つ



シリーズ

医療の現場から

医療法人F.A.A.おおつかクリニック

大塚 由美理事長に訊く

高濃度ビタミンC点滴・温熱療法を駆使し、
体にやさしいがん治療を展開

―「体の内面からの病的老化予防」

前向きな気持ちで歳を重ねていってほしい

特集

がんの温熱療法

温熱療法の最近の動向

―特に温熱免疫療法について

古倉 聡 京都府立医科大学消化器内科准教授

苦痛なく、しっかり治療できる熱ショック蛋白治療

―豊富な臨床経験に基づく科学研究の成果

星野泰三 統合医療ビレッジグループ理事長

統合医療クリニックにおける深部加温療法

―INDIBAハイパーサーミア療法

森 吉臣 医療法人社団健若会 赤坂AAクリニック院長

マイルド加温療法・高温加温療法と高濃度ビタミンC点滴療法の併用

松山 淳 医療法人社団松寿会松山医院院長

特別
インタビュー

大手町さくらクリニック in 豊洲 西山寿子院長に訊く

私のがん治療～患者さんの希望に、最大限沿った治療を提供する



大塚 由美理事長に訊く

構成／希瀬本夕紀 医療ジャーナリスト

高濃度ビタミンC点滴・温熱療法を駆使し、 体にやさしいがん治療を展開

「体の内面からの病的老化予防」 前向きな気持ちで歳を重ねていってほしい



大塚由美(おおつか・ゆみ)

1985年、上智大学外国語学部英語学科卒業。東京医科歯科大学臨床検査医学教室勤務(翻訳業務など)。1994年、日本大学医学部卒業。大分医科大学内科第一入局。大分赤十字病院内科転属。1995年、杉村記念病院内科転属。1996年、大分労働衛生管理センター附属診療所転属。1998年、佐伯中央病院内科勤務。2002年、ひらまつ病院勤務。2004年、現職。日本内科学会内科認定医。日本抗加齢医学会専門医。日本医師会認定産業医。

福岡県福岡市の7つの行政区の1つを担う早良区は、北が玄界灘に面した博多湾、南が佐賀県との県境にまたがる脊振山地と接しています。その面積は7つの行政区のなかで最も広く、地下鉄・バス・都市高速などの交通も発達しています。

この交通網の1つである七隈線は、同市西区の橋本駅と、同市中央区の天神南駅を結んでいます。その地下鉄路線の次郎丸駅から徒歩1〜2分のアクセスに恵まれた場所に、今回登場する医療法人F.A.A.おおつかクリニック(以下「おおつかクリニック」)があります。

同クリニックはアンチエイジング外来を軌道にのせて、病的老化の予防や良好な体調の維持などを希望する患者さんに対し、高度な技術と専門知識で向き合っています。また、超高濃度ビタミンC点滴療法(以下「高濃度ビタミンC点滴」)などを駆使し、体にやさしい治療をがん患者さんに提供しています。

そんなおおつかクリニックの大塚由美理事長に、アンチエイジングを始めた経緯・実践している治療法・統合医療の展望などについて訊きました。

自身の体験をきっかけに、 アンチエイジング外来を スタート

——大塚先生は医学の道に進む以



最寄駅から徒歩1～2分のところにあるおおつかクリニック



クリニックの入口は内科外来（右）とアンチエイジング外来（左）に分かれる



明るい雰囲気迎え入れてくれる内科外来の受付

ニックでアンチエイジング外来を始めたきっかけです。未病の段階、病気になる以前に、地域の方々に何かできることはないかと……。

高濃度ビタミンC点滴でQOL改善・副作用軽減などを図る

——クリニック名に冠している「FFA」には、どのような意味が込められているのでしょうか？

大塚「福岡アクティブエイジング」と「福岡アンチエイジング」をかけている

前に、文系の学部で学ばれていましたね。まずは、医師になった経緯から教えてください。

大塚 2つの文系大学を卒業していますが、2番目に入学した大学では語学を専攻しており、卒業後は東京医科歯科大学の教授の元で翻訳と秘書業務をしていました。そんななか、自分がほんとうにやりたい仕事を模索し始め、職場の医師の姿を見たり、父や兄が医師であることも影響して、遅まきながら、自分も医師になりたいと思うようになったのです。そして、勉強して医学部を受験した、というわけです。ちなみに、その医学部時代に知り合った夫は、現在当クリニックの院長を務めています。

——こうして医師になり、内科医として医療に携わってきた先生が、勤務医を経てクリニックを開業されました。そして、アンチエイジング外来を始められました。それは、なぜだったのでしょうか？

大塚 現在の場所にクリニックを移転させたのは2007年ですが、その少し前に私自身が朝、起きるのが辛いほど、心身ともに疲弊していたのです。しかし、検査をしても何も異常が見つかりませんでした。元々、私は東洋医学に関心があり患者さんに漢方も処方していたのですが、自分の症状はその東洋医学でいうところの未病であり、巷で言われる「プチ病」だと思っていました。その状

態から脱却する方法を模索しているなか、抗加齢医学に出会い、「老化のスピードを可能な限り遅らせて亡くなる直前まで元気で過ごすことを目標とする医学」にたいへん興味を抱くようになったのです。そして、プラセンタ（ヒト胎盤エキス製剤）注射のことを知りました。また、クリニックを移転して間もなく、点滴療法研究会の会長である柳澤厚生先生に当クリニックに来ていただき、点滴療法に関する指導も受けました。つまり、自らが被験者として受けてみて図らずもその効果を体感したアンチエイジングを、今度は患者さんに予防医学の一環として提供したいと思うようになったのが、当クリ

ニックです。アクティブエイジングとは、老いを消極的に捉えないで、若さを維持して積極的に歳を重ねていこうという考え方です。もう1つのアンチエイジングには、内科的立場に立つての「体の内面からの病的老化予防」という意味を込めています。それと、当クリニックでは、血管・神経・ホルモン・筋肉・骨などが病的老化を引き起こさない、または病的老化の状態にある場合はより健康的で若々しい状態に戻すためのテララーメイドの治療を行っています。

——そのようなアンチエイジング外来の治療の柱に据えているのが、高濃度ビタミンC点滴ということになるのでしょうか？



シリーズ 医療の現場から



広々とした内科外来の待合室



点滴ルーム

大塚 現在、とりわけ力を注いでいるのがプラセンタ療法と並んで高濃度ビタミンC点滴です。高濃度のビタミンCは「天然の抗がん剤」とも称されていますし、抗がん剤との併用による相乗効果も期待できます。また、抗がん剤による副作用の軽減や、QOL（生活の質）の改善にも役立っています。

——高濃度ビタミンC点滴による単独治療でも、がんに対する効果は認められているのでしょうか？

大塚 NIIH（米国立衛生研究所）、NCI（米国立がん研究所）、FDA（米食品医薬品局）に所属する研究者たちが共同で研究を行い、2005年9月20日付けの『米科学アカデミー紀要』という権威ある雑誌に「ビタミンC点滴単独でも、

高濃度ビタミンC点滴（血中濃度が350〜400mg/dl）が選択的にがん細胞を叩く」という内容の論文を発表しています。それが、アメリカ国内でも注目され、大きなセッションを巻き起こしたのです。

——高濃度ビタミンC点滴が、がん治療に効果的である機序を教えてください。

大塚 ビタミンCのサプリメントをいくら経口投与しても、がん細胞を殺すほどの十分な血中濃度まで上がることなく、その大部分が体外に排出されてしまいます。しかし、血管から大量のビタミンCを投与することで細胞の周囲に過酸化水素が発生し、それを代謝する酵素であるカタラーゼを持たないがん細胞のみが攻撃されるのです。当クリニックでは、

先述の柳澤先生が、リオルダン博士（米国の国際人間機能改善センターの所長）が推奨する方法を日本人向けにアレンジしたプロトコルに則って点滴療法を行っています。

——おおつかクリニックには、どのような方が高濃度ビタミンC点滴を受けに来院しているのですか？

大塚 抗がん剤を服用し続けていてその耐性が生じてしまい、効果が乏しく副作用によって体調が悪くなる一方だという方。主治医から、これ以上西洋医学では為す術がないと言われ、免疫細胞療法と併用している方。放射線治療や分子標的薬との併用の方。あるいは、再発予防目的や、がん家系で予防のために来院する方もいらっしゃいます。QOL改善・副作用軽減の他に、抗がん剤との併用でがんが縮小した患者さんも少なくありません。

充実した検査機器、多岐にわたる治療法

——おおつかクリニックでは、アンチエイジング外来の他には、どのような医療が展開されているのでしょうか？

大塚 現在、一般内科外来では糖尿病、高脂血症、高血圧症、高尿酸血症（痛風）などの生活習慣病や、リ



アンチエイジング外来では完全個室でカウンセリングや検査などが受けられる

ウマチ、膠原病、アレルギー性鼻炎・アトピー性皮膚炎などのアレルギー性疾患、気管支喘息・肺気腫症などの呼吸器疾患といった病気の診療を行っています。また、経鼻内視鏡や大腸内視鏡による胃がん・大腸がんの検査、腹部・乳房のエコー検査、大腸ポリプの日帰り切除術も行っています。さらに、漢方治療も取り入れて、自律神経の調整や治療力の向上を図っています。その他、健康診断、骨密度測定、プラセンタ療法なども行っています。

——内視鏡やエコーの他にも、検査機器が充実されていますね。

大塚 アンチエイジング外来のほうでは、体内のフリーラジカル（血管のさびつきを助長する元凶）の量、およびそれに打ち克つ力がどれくら



極細経鼻内視鏡は、胃がんの早期発見のための画期的な検査手段である。検査にあたっているのは大塚誠院長



骨密度測定装置では微量のレントゲンを使用して骨密度が測定される

大塚 がん治療としてはインディバ温熱高周波療法を取り入れています。この温熱療法は、電磁波エネルギーによる高周波温熱機器によって、身体の深部まで容量の多いエネルギーを透過し、各組織に安全レベルのジュール熱を容易に発生させることができます。高濃度ビタミンC点滴との相性は抜群で、相乗効果が期待できます。

その他、α-リポ酸点滴・グルタチオン点滴療法・プラセンタ注射などを行っています。

いあるかを、指先から少量の血液を採って行う酸化ストレス・抗酸化力検査、体内に有害重金属が過剰に溜まっているか、あるいは必須ミネラルが不足していないかを調べるための毛髪ミネラル検査、動脈硬化の程度や骨密度を測定する骨年齢検査・血管年齢検査などを実施しています。

——アンチエイジング外来では、高濃度ビタミンC点滴療法他には、どのような治療が行われているのでしょうか？

チオン点滴療法・プラセンタ注射などを行っています。

α-リポ酸にはビタミンCやビタミンEの約400倍とも言われる抗酸化力があり、血管と共に老いる体のさびつきを抑えるアンチエイジング効果も期待できます。

さらに、体内で酸化してしまったビタミンCやビタミンE、コエンザイムQ10などを再活性化してリサイクルさせるのです。当院では、ビタミンCの血中濃度をより高い値で維持させることを主目的として、α-リポ酸点滴を高濃度ビタミンC点滴と併用することもあります。また、強力な抗酸化作用による細胞の若返り効果を目的として、α-リポ酸の単独での点滴も受けていただけます。グルタチオン点滴療法には、抗酸化力の強化や体内に蓄積された重金属を排出する効果があります。また、パーキンソン病、とりわけ発症初期のパーキンソン病の病状を改善させる効果も期待できます。さらに、抗

がん剤による末

梢神経障害に対しても有効性が認められています。

プラセンタ注射は、日本在住の健康な産婦さんの胎盤から抽出した胎盤エキスの注射です。美肌・美白効果のみならず、自律神経調整作用や免疫力賦活効果、活性酸素除去作用などがあります。なお、更年期障害や慢性肝炎・肝硬変症の方には保険適応があります。

自分が受けたい治療を提供し続けていく

——先生が医師として掲げている信念とは、どのようなものでしょうか？

大塚 がん治療に関して言えば、治療法を押し付けるのではなく、その状況に適した治療法を提示し、そのなかから患者さんに選択してもらうようにする、ということです。言い換えれば、もしも私自身ががんになったときに受けたい治療を患者さんに提供し続けていく、ということです。



インディバ温熱高周波療法は高濃度ビタミンC点滴との相性が抜群である

また、常に患者さんと向き合いながら、地域に根ざした治療を行っていきたいと思っています。そのためにも、自宅にいるような安心・くつろぎを感じることができ、快適な空間で誠実な医療を実践していきたいですね。

それと、当クリニックのアンチエイジング外来を受診し、未病・予防の段階で点滴療法や温熱療法を受けていただき、多くの人に心身ともに元気になっていただくのが願いです。

——先生は、在宅医療にも携わっています。

大塚 はい。元々は、在宅医療を中心に始めたクリニックでした。現在は主に夫が患者さんのご自宅や老人ホームなどの施設にうかがっています。



シリーズ 医療の現場から

す。
——今後、統合医療はどのような方向に進んでいくと思われますか？ また、どのような方向に進めていきたいとお考えでしょうか？

大塚 樹状細胞療法や活性化リンパ球療法といった免疫細胞療法も含め、医療における統合医療の割合はより高くなってくると思います。そのなかで、私は自分なりに実践できる統合医療に携わっていきたいと考えています。

抗がん剤は、正常細胞にかなりのダメージを与えるのは周知の事実です。そのダメージを少しでも減らすために、主治医には他の治療法も考えていただきたいと思うのですが、了解を得られないケースが多々あります。

高濃度ビタミンC点滴にしても、

先述の『米国科学アカデミー紀要』に記載された論文のコピーに私が書いた説明文を添付して患者さんにお渡ししても、なかなかそれを主治医に見せられる雰囲気ではないということでした。頭ごなしに、標準治療以外の治療法を否定する主治医がいかに多いことか……。

そのようななかにあつて、少数ですが、「こんなにしっかりとしたエビデンスがある治療法ならば、抗がん剤と併用してみよう」と高濃度ビタミンC点滴を希望する患者さんの背中を押してくれる若手の先生もいらつしやるのが救いです。柔軟性・理解力がある医師が、標準治療の領域にも増え、患者さんが希望する治療を主治医に気兼ねせずに受けられるようになるといいですね。

——近い将来、先生が取り組んでみたいと考えている治療法は？

大塚

現在、患者さんの体調改善のために保険適用の範疇で漢方を処方しているのですが、いずれは抗がん漢方薬についても学んで、他の治療と併用していきたいと思っています。

それと、分子整合医学に基づいた食事療法を習得し、患者さんに食事面の指導も行いたいと考えています。そのためにも、時間的な余裕ができたら、管理栄養士の資格を取得したいと思っています。

——最後に、現在、がんと対峙している患者さんにメッセージ、アドバイスなどをください。

大塚 高濃度ビタミンC点滴は、抗がん剤の副作用によって食欲低下や全身倦怠感などで苦しんでおられる方や、抗がん剤や分子標的治療、放射線治療などが効かない方などにお勧めです。この点滴療法によって、食欲が湧いてきたり、顔色がよくな

ったりした方、がんが退縮したり、画像上においてがんが消失したりした方など、多くの人が元氣を取り戻しています。

がん治療は、標準治療がすべてではありません。高濃度ビタミンC点滴などの西洋医学以外の治療をご希望するのであれば、主治医に気兼ねすることなく受けてほしいです。そして、加齢に抗うというよりも、元氣でアクティブに年齢を重ねていく

●医療法人FAAおおつか クリニック

福岡市早良区次郎丸2-10-43
次郎丸クリニックビル2F
TEL:092-874-8171
FAX:092-874-8172
<http://www.faa-otsuka.jp>

がんの温熱療法

統合医療クリニックにおける 深部加温療法

— I N D I B A ハイパーサーミア療法

森吉臣

医療法人社団健若会

赤坂A Aクリニック院長



温熱療法の歴史

温熱療法は、身体を温めて病気を治療する多種の治療法の総称です。日本でかなり古くから行われていますが、温泉治療は湯治として昔から親しまれてきました。そして遠赤外線療法やホットパックなどは、神経痛やリウマチ治療に盛んに利用されています。最近では、がん細胞が熱に弱い性質を利用してがんに対する治療法として

も行われ、ハイパーサーミア療法と呼ばれて山本ビニター社のRF-8加温装置が市販されています。しかし、この機器は高額で広い設置スペースが必要など、クリニックなど小規模施設での備品としては不向きです。

がんが熱に弱いことは、過去においてたまたま高熱の感染症で苦しんだ後に、その人ががんが縮小した事実がいくつか報告されています。これを医療で再現するため、過去にいくつかの実験的治療が行われています。何種類かの死菌を混合した発熱物質で作製したコーリー毒素（ウイリアム・コーリー医師）を投与したり、梅毒治療に使われた硫黄療法、回帰熱スピロヘータ移植法などいくつかの発熱療法が登場しました。実際には発熱の程度や時間が不十分であったり、患者側の感受性の相違で、不確実で効果もあり期待できない結果でした。

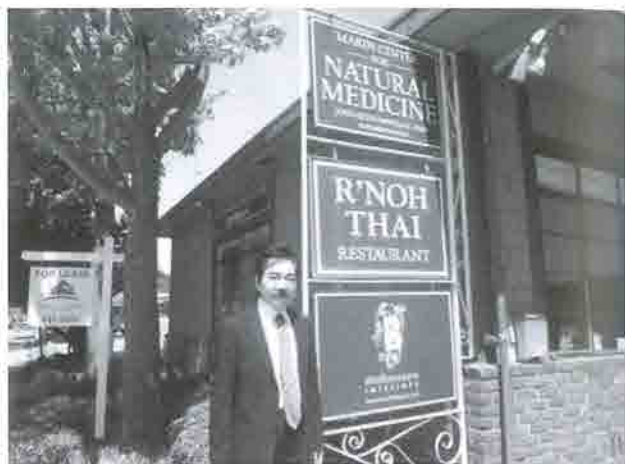
クリニッケレベルでの温熱療法には、INDIBA社の機器がお勧めできます。なぜならコンパクトなデザインでわずかなスペースに設置でき、高額ではなく、またエネルギー効率が良いので、小型ながら効果は期待できるので。

統合医療クリニックでの 温熱療法

統合医療で行う医療は、近代西洋医療を軸として、必要な代替医療を組み合わせて治療します。統合医療におけるがん治療メニュー

は、高濃度ビタミンC点滴療法を中心に、高濃度αリポ酸療法、ハイパーサーミア療法、ナルトレキソン療法、免疫強化リンパ球療法、血液クレンジング療法、がん遺伝子療法、電子免疫療法など実に多彩です。

日本よりヨーロッパで統合医療は浸透していますが、米国でも統合医療は新しい医療の姿として期待されています。私が訪問したカリフォルニアの統合医療クリニックでは（写真）、自然療法を取り入れ、点滴療法と血液クレンジングで地域の人たちの健康を守っていました。病院で標準治療を使いま



米国カリフォルニア州、Natural Medicineにて

果たしてさじを投げられたがん患者さんに、延命効果と大きな希望を与えている役割はとても意義があり尊いものです。

日本での統合医療のがん治療はもちろん長い歴史がありますが、2006年から点滴療法研究会（柳澤厚生会長）が中心となって普及した高濃度ビタミンC点滴療法が全国的に広がり、多数のクリニックに導入され、急速に統合医療が広がりを見せています。現在、

治療の中心となっている高濃度ビタミンC点滴は、温熱療法との併用で効果が増強されます。また抗がん効果を上げるために、デトックス・キレーション治療や、抗酸化療法などの併用も重要で、この分子栄養学的な治療の考え方が統合医療の真価を発揮する基本となります。

温熱療法が高濃度ビタミンC点滴の抗がん作用を増強—実験的証明

高濃度ビタミンCの抗がん作用については実験的に明らかにされ

ていますが、温熱療法がこの作用を増強するかどうかについての実験的報告は見られません。そこでヒト結腸がん細胞株（SW620）とヒト乳腺がん細胞株（MCF7）を用いて検討しました。

培養液中のがん細胞にビタミンCを400mg/dlの濃度で4時間作用させ、そのときに培養温度を37℃と39℃の2種類の温度設定をしました。4時間ビタミンCに暴露した後に、ビタミンCを含まない培養液に細胞を移し替えて、48時間後まで培養しました。対照として正常線維芽細胞を用いました。

対照の正常線維芽細胞では、細胞が分化して成熟が促進されましたが、正常細胞の成長を阻害したり死滅させる作用はありませんでした。

さて、がん細胞株のビタミンCの感受性を、生きている細胞の百分率で比較してみました。乳がん細胞株（MCF7）では、培養温度を37℃と39℃で比較すると、37℃では1日目やや増加し、39℃では88%に減少していました。そして2日目には24%と16%で、39℃培養で生存数が著明に減少しました。一方、ヒト結腸がん細胞株

（SW620）では、1日目いづれも軽度増加しますが、2日目で、97%と58%で、ここでも39℃培養で生存数が減少しました。

このように、ビタミンCに対して、2つの培養株で感受性の違いを認めました。SW620株ではビタミンCに対して感受性が低く、死滅細胞が少なかったのですが、加温を併用することで、効果が増強されたのです。このようにマイルド加温療法を併用することでビタミンCに感受性の低いがんにも効果が期待できるのです。また温熱療法の併用によりビタミンCの効果が飛躍的に向上することが証明されました。

INDIBAハイパーサーミア療法

温熱療法として、当院ではINDIBAハイパーサーミアを採用しています。ここで使用するINDIBA Cretの特徴は、高周波電磁波エネルギーを体内に送り込み、体の深部で細胞内外の分子を振動させ、そのときの分子の摩擦によってジュール熱を発生させる機器です（図1）。

腫瘍の温度上昇が治療目的とな

りますが、腫瘍が深部にある場合が多く、そのためには生体が発生するジュール熱を利用した機器でないと深部加温が達成できません。発熱体を使って皮膚表面から熱を加えた場合、温度の上昇は体表面だけに限られるのです。INDIBA Cretは、0・4〜0・5 MHzのラジオ波の中波周波数帯を使用します。そのために体表表面のホットスポットの形成を抑制し、効率的に体内にエネルギーを送り込むことができるのです。また、特許技術である容量性電移法と抵抗性電移法（RET）によって、容量の多いエネルギーを体深

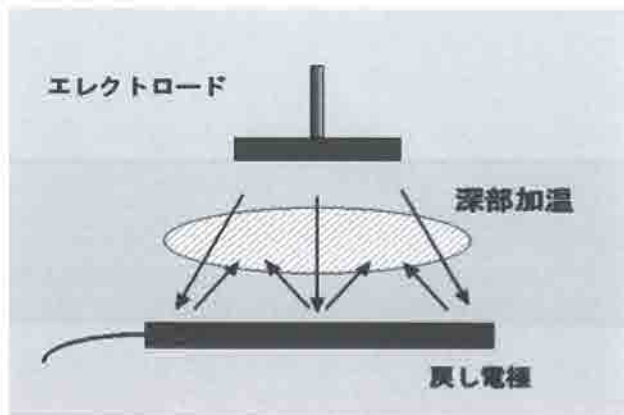


図1 INDIBA ハイパーサーミアの深部加温の原理

部に送り込むことが可能なのです。

INDIBA ハイパーサーミア療法の併用で効果の増強する治療

以下に列挙するのは、INDIBA ハイパーサーミア療法を併用することで効果の増強する療法です。

- 1、高濃度ビタミンC点滴療法
- 2、ウクライン療法
- 3、免疫強化療法
- 4、放射線療法
- 5、化学療法

INDIBA ハイパーサーミアの種類と治療法

温熱療法の治療法には、マイルド加温療法と高温加温療法があります。

温熱療法の効果の基本は、組織の温度が5〜10℃上昇することによって、細胞内に誘導されるHSP（熱ショックタンパク）の増加によってもたらされます。

マイルド加温療法（39〜40℃）

この方法は、がんを直接死滅させる目的ではなく間接的に抗がん効果を発揮します。体温を、3〜4℃上昇させることで、体細胞にHSPの増加をもたらし、免疫強化、がん細胞の抗原性増強、ビタミンC点滴療法の感受性増強、放射線の効果増強、自律神経の調整など多様な効果を発揮します。放射線治療と併用すると、40℃程度の低い加温でも十分に放射線治療の効果を高めることが知られています。

放射線治療だけでは不十分な腫瘍の場合、たとえば腫瘍が大きくて腫瘍内に血管の乏しいがんほど、実は温熱治療が効きやすいのです。そこで放射線治療は温熱療法と併用する意味があります。また、温熱療法は抗がん剤との併用も有望で抗がん剤の効果も増強させます。

増感効果が報告されている抗がん剤としては、シスプラチン（CDDP）、5-FU、マイトマイシンC、アドリアマイシン、ブレオマイシンなどがあります。その他、免疫力を高める効果を期待して温熱療法を行うこともあります。今後、期待されている分野

ガン細胞は温熱感受性が高い

温熱感受性が高い

- ▶ 低酸素状態
- ▶ pHが酸性（嫌氣的解糖）
- ▶ 血管が未熟

細胞周期による温熱感受性
放射線感受性

- ▶ (M) 細胞分裂期
- ▶ (G1) 前DNA合成期
- ▶ (S) DNA合成期
- ▶ (G2) 分裂準備期

として、がんの予防にも温熱療法が期待されています。温熱療法によって産生されたHSPは72時間くらいでかなり減弱します。そのことを念頭に、温熱療法の実施には、熱ショック蛋白が少なくなった時点で、再度熱ストレスを加えることが大切です。これを繰り返す行うことが重要です。

マイルド加温療法の手技

腫瘍への治療…腫瘍のある部分を中心に、INDIBA Cretの戻し電極板と、エレクトロードとで体を挟むようにして施療します。通電

図2 ガン細胞は温熱感受性が高い

がん患者と家族に
希望の光を与える情報誌

ライフライン21 がんの先進医療 VOL.2

全国書店で発売中!!

●巻頭対談● 21世紀のライフライン
ヒトゲノム解析・がんワクチン研究の進展具合と
その実用化への障壁
個別化医療が「日本医療の新機軸」=前編=

中村祐輔(内閣府医政局イノベーション推進室長)
上 昌広(東京大学医科学研究所特任教授)

●特集● 重粒子線治療/陽子線治療

◇重粒子線治療

がんの治癒率を改善し、世界に向けて新しい粒子線治療の情報発信地にする
村上雅雄(兵庫県立重粒子線医療センター院長)

◇陽子線治療

①国立がん研究センター東病院の陽子線治療
陽子線治療が絶対的な優位性を誇る分野—肝機能の不良が
原因で切除できない肝がんと副鼻腔がん
河島光彦(国立がん研究センター東病院放射線治療室室長)
②南東北がん陽子線治療センター
不眠症和(脳神経疾患研究所附属 南東北がん陽子線治療
センター長)

●特報● 東日本大震災関連情報

東日本大震災—被災地患者からの「声」
大地震でジャーナリスト、医療者はどう動いたか—被災地からの
レポート

●施設訪問●

◇脳神経疾患研究所附属 南東北がん陽子線治療センター
◇医療法人社団新樹会 新横浜かとうクリニック

■がんの薬物療法 分子標的薬

■全国がん患者の会—覧



定価 1200円

発行:株式会社露書房
発売:株式会社星雲社

本誌は大型書籍として書店にて販売されています。
書店にない場合は、直接下記へお申し込みください。

露書房

〒248-0002 神奈川県鎌倉市二階堂690
TEL・FAX:0467-25-6221

星雲社

〒112-0012 東京都文京区大塚3-21-10
TEL:03-3947-1021
FAX:03-3947-1617

クリームをエレクトロード部分の皮膚に塗り、ゆつくりと直線状あるいは、円を描きながら約20分間施療します。腫瘍のある部分を中心に広い範囲で行うのです。

高温加温療法—がん組織は温熱感受性が高い

がん組織には正常組織と比べて温度上昇しやすい条件が揃っています。がん組織の血管は未熟で、温度の上昇に応じて拡張して、熱を分散させることができないために、がん組織の温度が上昇します(図2)。

その他、がん組織は低酸素状態であり、嫌氣的解糖を行っているために酸性の環境下にある点も温度上昇につながります。隣接する

正常組織では、血管が拡張するために熱が拡散して上昇しません。

高温加温療法の手技

腫瘍のある部分の体を挟むように、施療と反体側にINDIBA Cretの戻し電極板を置いて、エレクトロードは通電クリームを塗布後に最初の3分間はほとんど動かさないで、十分にエネルギーを供給します。その後、ゆつくりと小さな円を描くように温めます。腫瘍がある場所に一致して熱い痛みを訴えるのを待って、わずかにエレクトロードの位置をずらして患部周辺を温め、また患部に戻ってそこを温める施療となります。再び苦痛を訴えれば、外すなどを繰り返して、計20〜30分間行います。

高濃度ビタミンC点滴との時間差ですが、点滴前、点滴中、点滴後のいずれかに20分〜30分間行います。点滴前か点滴中に高温加温療法を行い、点滴後にはマイルド加温を追加すると良い結果が得られます。

副作用のないがん治療を目指して

抗がん剤の研究開発は日進月歩ですが、効果と副作用について未だ満足できるところまで到達していません。抗がん剤が目指すのはがんの完全消滅ですが、少なくとも抗がん剤の使用によって延命効果が得られることが最低条件となります。副作用のために食欲、免

疫力、体力が落ちて、死期を早めることがあつてはならないのです。

ですから、抗がん剤の評価にQOL(生活の質)を重視すべきと思っています。

近年になって、高濃度ビタミンC点滴療法をはじめとして、INDIBAハイパーサーミアなど副作用がなく、抗がん効果のある治療が複数開発されています。単独での抗がん効果に加えて、併用によってほとんどの療法の効果をサポートできるINDIBAハイパーサーミアの今後に大いに期待しています。

福田 一典 銀座東京クリニック院長

私のがん医療 漢方からウクラインまで



私が実践しているのは、生薬やハーブ、食品、サプリメントなどを用いた、体にやさしいがん治療です。とくに、標準治療における副作用の軽減と効果増強、QOL（生活の質）の改善、再発予防、延命、がんとの共存などを目的とした治療を行っています。

当院における治療内容は、大きく4つに分類できます。その4つをA・B・C・Dとすると、まずAとしては当院の患者さんの約80%が使っている漢方薬が挙げられます。当院の漢方薬は、日本や中国で使われる生薬の他に、欧米のハーブ治療やアイユルヴェーダなどの伝統医療で使用されている薬草などを用いています。Bは、患者さんの約30%が使用している、メラトニン・ジンドリルメタン・R体αリ

ポ酸&セレン・ω3不飽和脂肪酸・シリマリニン・IP6&イノシトールなどです。たとえば、抗がん剤の副作用軽減や再発予防を目的にしているときは、副作用がなくそれなりの効果があり、比較的、安価なA・Bが中心になってきます。

そして、標準治療を受けている患者さんの治療が行き詰まったときは、Cであるアルテスネイト、低用量ナルトレキソン、ジクロロ酢酸ナトリウム、メトホルミン、COX-2阻害剤、シメチジンなどを利用することで、抗がん剤の効果アップが期待できます。Dは、サリドマイド、ノスカピン、ラパマイシン、高濃度ビタミンC点滴、ウクラインなどで、他に治療法がない患者さんに対し、使うことがあります。

当院の患者さんの約20%がCを、約10%がDを使用しています。ですから、Aを中心に、B・C・Dのなかのいくつかを組み合わせているのが現状です。

また、当院では、患者さんの症状や病状、治療状況に応じた目的別に先述の治療法を行っていきます。その患者さんに対する目的が「がん細胞のエネルギー産生の阻害」であればジクロロ酢酸ナトリウム・R体αリポ酸・シリマリニン・半枝蓮、「腫瘍血管新生の阻害」であればサリドマイド・COX-2阻害剤・アルテスネイト・シメチジン・ノスカピン、「免疫細胞の活性化」であれば漢方薬・メラトニン・シメチジン・IP6&イノシトール、「酸化ストレスの軽減」であればR体αリポ酸・セレン・COQ10・メラトニン・漢方薬、「副作用の軽減」であれば漢方薬・メラトニン・R体αリポ酸・セレン、「内因性オピオイドの産生増強」であれば低用量ナルトレキソン、といった具合です。

こうした補完・代替医療を上手に利用することで、がんの治療効果は上がってくると考えています。

高濃度ビタミンC点滴療法、リンパ球療法…

高周波温熱機器
さまざまな療法の補完に **「CRet System」**

株式会社インディバ・ジャパン 〒152-0003 東京都目黒区碑文谷5-15-1 1F
TEL:03-5768-8871 FAX:03-5768-8872
www.indiba.co.jp E-mail:indiba@symphony.plala.or.jp